

令和五年十二月

交通安全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十六集



「気を付けてね」が

なまる世界へ

一般社団法人

愛媛県交通安全協会

後

援

愛媛県教育委員会



この作文集は、伊予銀行様からご寄付いただいた「交通安全定期預金の積立金」の一部を活用して作成しました。

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合わせて百二十八校から二千二百十二編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第二次審査を経た七十八編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十二編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んできました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、広く交通安全の大切さについて率直に、かつ、切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十六集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は、入選作品を代表して、北宇和郡鬼北町立近永小学校六年生の大野でなさんの『氣を付けてね』が広まる世界へ』とさせていただきます。この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。応募していただいた多くの小・中学生の皆様に感謝いたしますとともに、作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動に御理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和五年十二月

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

いのちをまもる	伊予市立中山小学校	二年	相中 あいなか	れな	1
交通安全のためにできること	西条市立神戸小学校	四年	二宮 にのみや	銀仁 ぎんじ	2
シートベルトの大切さ	伊予市立中山小学校	四年	亀崎 かめざき	結愛 ゆあ	3
事故のない毎日へ	四国中央市立川之江小学校	六年	篠原 しのはら	絢 あや	4
「だろう」じゃなくて「かもしれない」	西条市立神拝小学校	六年	岡林 おかばやし	佳歩 かほ	5
内子にひそむ危険と私たち	内子町立内子小学校	六年	服部 はっとり	帆花 ほのか	6
「気を付けてね」が広まる世界へ	鬼北町立近永小学校	六年	大野 おおの	てな	8
一つしかない命を守るために	篠山小中学校組合立篠山小学校	六年	岡原 おかはら	梓実 あみ	9

「中学生の部」

常にみんなの安全を	四国中央市立三島南中学校	一年	曽我部 温花 そがべ のどか	10
父の思い	新居浜市立南中学校	一年	續木 祐志 つづき ゆうし	11
祖父の免許返却を通して	愛媛大学教育学部附属中学校	一年	仙波 乃阿 せんば のあ	12
みんなのための交通安全	松山市立内宮中学校	一年	高松 瑠花 たかまつ るか	14
これまでの経験を生かす	愛媛大学教育学部附属中学校	二年	宮川 祢音 みやがわ ねお	15
自分の命は自分で守ろう	松山市立鴨川中学校	二年	大橋 蓮 おおはし れん	16
命を守る	松山市立久米中学校	二年	荒井 将吾 あらい しょうご	17
自分の命を守るために	八幡浜市立松柏中学校	二年	新瀬 美優 しんせ みゆ	19
交通事故で失わない命	鬼北町立広見中学校	二年	中川 いろは なかがわ	20
だから私はヘルメットをかぶる	新居浜市立中萩中学校	三年	曽根 美優 そね みゆう	21
安全な社会の実現のために	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	高橋 美夏 たかはし みか	23
事故を防ぐために自分にできること	松山市立三津浜中学校	三年	篠原 ひより しのはら	24
ヘルメットの必要性和重要性	松山市立三津浜中学校	三年	渡部 蒼央 わたなべ あお	26
交通事故 ^{ゼロ} を目指して	松山市立三津浜中学校	三年	高橋 春瑠香 たかはし はるか	27
誰かの命を守る行動	松山市立南第二中学校	三年	曽我 瞳 そが ひとみ	28
「気を付けて」の大切さ	八幡浜市立松柏中学校	三年	鳥生 咲彩 とりう さあや	30
一人一人の命を守るために	愛南町立御荘中学校	三年	桑原 愛結 くわはら あゆ	31

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

いのちをまもる

伊予市立中山小学校

二年 相中 れな

わたしの通っている中山小学校では、一年生と二年生の時に交通安全教室が開かれます。おまわりさんや交通しどういんの方、見守りたいうの方たちが来てくださって、交通あんぜんについて教えてくれました。ふみきりのわたり方やこうさてんのわたり方もわかりました。

中山小学校の近くには、おうだん歩道があります。いのちをまもるために、とび出しをしないで、じぶんの目で左右をよく見てわたるようにしています。そして、かならず手をあげてわたります。

家の近くのどうろでも気をつけていることがあります。わたしは、ごみすてのお手つだいをよくしています。ごみすて場まで行くどうろも車を通ります。弟もいっしょに行くときがあります。弟があぶなくないように、いつも気をつけています。ほかの時にも、弟や妹がじこにあわないように、手をつないで歩くようにしています。

夏休みには、家族で車にのって川にあそびに行ったり、買いものに行ったりしました。お父さんは、あんぜんうんでんです。前をむいて、スピードは出さずにうんでんします。いつもきちんとシートベルトもしています。だから、わたしは、楽しく安心して車にのることが出来ます。

夏休みのある日、お母さんときょうだいたちで車で買い物に行きま

した。その時、前からよそ見をしながらうんでんしていた車が、わたしたちの車にむかってきて、ぶつかりそうになりました。お母さんがブレーキをふんでうまくよけることができました。相手の車の人は、スマホを見ていて、よそ見をしていたようでした。

もし、じこにあつていたら、わたしとお母さんと姉と弟と妹は、しんでしまつていたかもしれません。もし、そんなことになっていたら、かぞくがいつぱんにいなくなり、お父さんは、とてもかなしんだと思います。わたしの家では、家ぞくのたん生日をみんなで、おいわいします。ケーキをたべて、折り紙で作った手作りのプレゼントとお手紙をわたします。家ぞくのたん生日が、わたしの楽しみです。それが、いっしゅんでなくなるなんて。

わたしは、車をうんでんするひとには、よそ見しないで、あんぜんうんでんをしてほしいです。わたしも、交通安全に気をつけて生活したいと思います。



交通安全のためにできること

西条市立神戸小学校

四年 二宮 銀仁

ぼくはふだんからよく自転車に乗ります。友達と遊びに行くとき、買い物に行くとき、ソフトボールの練習に行くときなど、自転車はとても便利な乗り物だと思います。車を運転するのはめんきょがないうでできないけれど、自転車は練習すればだれでも乗ることができます。でも、ルールを守ってよく気をつけていないと事故をしてしまう危険があることをわすれてはいけませんと思います。みんなが安全にくらすためにできることを考えてみました。

まず、交通事故について調べてみました。小学生が事故にあう理由の一番はとび出し、信号むし、よく見ていないというものでした。ぼくもよく一年生のときは「とび出しをしないように。」と注意されました。ぼくがよく通る道や家の近くにも見えにくい場所があります。そこで事故を見たこともあります。事故を見て思ったことは「危ない。」と思っても車も自転車も急には止まれないということです。今まで楽しく乗っていた自転車が少しこわくなりました。

次に、家の人と交通安全について話をしました。見えにくい場所でのとび出しはしないことや、信号をわたるときはちゃんと車が止まったのをかくにんしてからわたることを約束しました。たまに黄色信号ぎりぎりですごい速さで走ってくる車を見ます。危ないなと思います。ぼくたちがルールを守っていても危ないと思うことがあるので、自分の目でちゃんとかくにんすることも事故にあわないために

大事なことだと知ることができました。

また、決められた場所を通ることも大切です。大きい国道は車や大きなトラックがたくさん走っています。信号や横断歩道を通るときで安全に通ることができません。はやく遊びに行きたいから、ここをわたれば早いから、車がきていなければいいじゃないかと思わずにいのちを守るために決められたことは守っていききたいです。

今回ぼくが調べて一番びっくりしたのは、自転車は車に分類されているということです。大きさもスピードも全然ちがうのにとおどろきました。だから、自転車に乗っているときは歩行者にも気をつけないうでいけないと思いました。よく、ニュースで自転車と歩行者がぶつかっている事故が起こっています。自転車もときには危ない乗り物になつてしまします。だから、歩行者には気をつけてスピードを出しすぎないように気をつけたいと思います。

ぼくが交通安全のためにできることを考えてみて、大事だと思つたことは決められたルールを守ることに加えて、交通社会の一員としての責任を持つことと、思いやりの気持ちとマナーを守って行動していくということです。それは、ぼくたち子どもだけではなく大人にもいえることだと思います。この気持ちをもちただけで危ない事故や悲しい事故をへらしていけると思します。一人一人がその気持ちをもちてルールを守るように、ぼくも声をかけていきたいです。そして、みんなが安全にくらす社会になればいいなと思います。

シートベルトの大切さ

伊予市立中山小学校

四年 亀崎 結愛

今から半年ほど前、お父さんが交通事故にあいました。その日は、雨がふっていて、わたしを学校に送りとどけてくれた後でした。

お父さんは、仕事に行く途中で、道路のセンターラインをはみ出してきた車にしようとなつされました。大きな事故だったため、そのままお父さんは、きゆう急車で病院まで運ばれました。

わたしは、この時の話を後で聞いて、とてもびっくりしました。お父さんは、

「シートベルトをしていたから、あまりけがをしなかったんだよ。」と、話していました。

お父さんの首には、シートベルトのあとがつくほどのしやうげきがあつたそうです。もしわたしが一緒に乗っていたら、シートベルトをしていても、子どもだから車の外へふつ飛んでいたかもしれない、と考えると本当にこわいです。

でも車は、仕事の通きんや日じよう生活、病院や買い物にかかせない重やうなものです。だからこそ使用する時は、交通ルールを守つて、ぜつ対に事故を起さない、事故にあわないという強い気持ちをわすれないで行動してほしいと思います。

子ども大人、年れい男女問わずルールを守つていても事故が起きしてしまうことがあります。運転者は、一度ではなく二度三度とかくにんし、雨の日は、スピードをゆるめたり、横だん歩道の近くでは周

りの人の動きをよく見たりできるだけの気配りをしてほしいです。

わたしの通学道路は、はげしい交通量ではありませんが、すぐそばの国道五十六号線はとも多いです。交通事故もよくおきています。学校や保育園、しせつなどの近くには、信号機や横だん歩道などがたくさんあるので、わたしたち子どもにできる交通ルールを守り、交通安全につとめたいです。

特に、集団登下校では、わたしは副はん長なので、下級生をしつかり見守り注意して、事故がないようにしたいです。

また、最近わたしは、バレーを始めました。友達と一緒に車に乗つて試合に行く機会がふえました。そんな時には、運転者の言うことをよく聞いてシートベルトをして、運転のじやまにならないように車内では、静かにしています。

今回のお父さんの事故の体験を、家族で話し合つたことで、あらためて命の大切さを感じました。

いつもは、当たり前のようにすごしてきた毎日ですが、「いつてきます」と、家を出てから、「ただいま」と、家に帰つて家族と顔を合わせるが、どんなに幸せなことかと思いました。

交通ルールを守ること、みんなが笑顔ですごしていけるように、自分のできることからしつかり取り組んでいきたいと思っています。

事故のない毎日へ

四国中央市立川之江小学校

六年 篠原 絢

毎朝、私の登校班では、同級生の班長さんが一年生の歩くペースに合わせて、ゆつくりと歩き始めてくれます。出発してすぐにある大きな国道は歩道橋をわたるので安全ですが、その後、少し見通しの悪い横断歩道をわたらなければなりません。ここでは毎朝保護者の人が立ってくれていて、車が来ていないことを確認して、私たちを安全にわたらせてくれます。この横断歩道に着くまでにすれちがったり、同じ方向に向かっている車や自転車、歩いている人はだいたい毎日同じ人たちです。駅まで子供を送っているお母さんの車、家から会社までを急いでいるお兄さんの車、学校へと急いでいる自転車の高校生のお兄さん、歩いて会社に出勤中のおじさん、きつとその人たちも朝の行動パターンが同じで、私たちいつも同じところで会々と、「あつ、いつもの子たちが元気に登校しているな」と思ってくれていると思います。私は副班長なので、一番後ろからそつとみんなのことを見守りながら歩いています。低学年の子たちがちよつとけんかをして歩く列が乱れたり、雨の日はかさをさして前が見えにくくなりながらだったり、いろんなことが毎日あります。そして、出発して二十分、やっと学校の前の横断歩道まで着くと、校長先生や地域の見守り活動で毎朝正門に立ってくれている人たちが見えてくると、今日も無事学校に着いたと、本当にほつとします。

ここで、どのようにすれば、いつも事故のない登下校ができるよう

になるのか考えてみました。

まず、どの人にも交通ルールを守らないといけない責任があることをそれぞれが分かつて行動することが大事です。道路を歩く人には、右側を歩く、横断歩道をわたる、などです。自転車に乗る人、車を運転する人にも、それぞれ守らないといけないルールがあります。だれか一人だけが交通ルールを守ったのでは、交通事故をなくすことにはつながりません。みんなが守ることがとても大事だと思うので、ちよつとくらいいいかと思つたりすることがないように、みんなが守ることが当たり前になるような毎日にしていかなければいけないと思ひました。

次に、自分のことをちゃんと周りに知らせることが大事だと思ひます。私なら、登下校の時に黄色い通学ぼうしをかぶつていて、小学生が歩いていることを周りに知らせることになって、横を通る車はスピードを落として、ゆつくり気を付けて走つてくれます。自転車なら、反射板やライトをつけると、夜、周りに知らせることができます。また、シルバーマークや初心者マークをつけていると後ろを走る車はいつもよりも注意して走ることができます。だから、自分のことを周りに知らせることも大事なことで思ひました。

最後に、周りの人への少しの思ひやりを持つことも、交通事故を減らすことにつながると思ひます。朝いつも会う車の人が、いつもよりも急いでいるようにスピードを出して運転をしていたことがありました。きつといつもよりも家を出る時間がおそくなつて、急いでいたのだと思ひます。通学の時間は、中学生の通学の時間とかぶつていたり、会社に向かう大人の人たちもとても多いです。私もいつもより準備がおそくなつてあわてて走つて集合場所に行くときには周

りのことが見えてないような気がします。きつとそういう時に交通事故が起きてしまうと思うので、急いでいる時でも、自分のおくれそうなことばかり気にするのではなく、周りの人たちも急いでいることを分かって、周りのことを少しでも思いやれるようにすることができればいいなと思いました。

いつ起こるか分からない交通事故をなくすことは難しいことだと思います。気を付けていても起きてしまうこともあります。でも、交通事故をなくすために私たちにできることはたくさんあります。みんなが家を出る時から少し時間に余裕をもって出発し、交通ルールをみんなが守り、自分がここにいることをちゃんと知らせ、周りの人を少しでも気にかけることができれば、交通事故もなくなり、みんなが朝、家を出たときと同じように元気に家に帰ることができると思います。そんな毎日になるように、まずは自分にできることをちゃんと心がけ、それが周りに広がっていく、そんな毎日になることを願います。



「だろう」じゃなくて「かもしれない」

西条市立神拝小学校

六年 岡林 佳歩

交通事故を起こさないためには、他人事だと思わずに、自分が事故にあうかもしれない、起こしてしまうかもしれないと、自分のことだと思うことが大切だと私は考える。

「うわっ、危ない。」

これは、ほんの一瞬の出来事だった。

今まで事故になんてあったこともないし、あわせたこともなかった。だから、きつとこれからもそうだろう。そう思ってしまったことが事故を引き起こしてしまう一歩手前だとは思わなかった。

私は日曜日に図書館へ自転車で行っていた。図書館から帰っている途中に曲がり角があったが、私は一時停止をせずに曲がった。すると、車がこちらに曲がってきてぶつかりそうになった。運転手の人も、私も、お互いに気が付いていなかったようだ。間一髪事故にはならなかったが、あのままぶつかっていたら、今私はどうなっていたかは分からない。「他人ごとじゃない、自分のことだよ。」や「油断大敵。」などの言葉を聞くが、それを改めて思い知らされた出来事だった。また、自分が過信している、油断しているということにも気付いた。しかし、この出来事が起きていなければ、私はその後どうなっていたのだろう。大きな事故で命を落としていたのかもしれない。事故によって誰か悲しむ人がいたかもしれない。この出来事があったおかげで、自分の交通安全に対する意識の低さに気が付いた。気付いたおかげ

で今、私がこうして元気な姿で生きているのかもしれない。そう考
えたとあの出来事は実際の事故にはならなかったが、これからの私
の命を左右する大切な出来事だったと思う。

この出来事を通して、事故を起こさないためには、他人事だと思
わずに自分のことだと思いうことが大切だと感じた。これから、自転
車に乗ったり、道路を歩いたりするときには「安全だろう」ではな
くて「危険かもしれない」を頭に入れて行動したい。このことを車
の運転手や、自転車に乗る人、道路を歩く歩行者など一人一人が心
がけることで、元気な体でそして何よりも命がある新しい一日をまた
送ることができると思う。

あの日以来、私は車が近くを通りそうになったら、友達や弟など
に「危ないよ、こっちによつて。」と言ったり、基本的なことだが左
右確認をしたりするなど、少しでも交通事故を減らせるような行動
をしている。



内子にひそむ危険と私たち

内子町立内子小学校

六年 服部 帆花

私が住んでいる内子町は、多くの観光客が訪れる観光地で、外国
人など様々な人が来ます。また、自然豊かな町で、山には動物がい
たり、きれいな川が流れていたりします。その反面、危険なところ
もたくさんあり、特に交通安全には気を付けて生活をしなければい
けません。そのことについて、私の考えを三つの視点で紹介します。

一つ目は、歩行者にとって危険なところです。内子町には、昔の建
物がそのまま残っている古い町並みがあります。その道路は、道は
ばがせまく、横断歩道や路側帯がありません。登下校の時に通学路
として使っている人もいますが、時間によつては、観光客など多くの
人が歩いていて、車通りも多い道なのでとても危ないと思います。ま
た、小学校から少し歩いたところには、国道があります。毎日多く
の車が通行しているためとても危ないです。道路をわたるとき、車
が来ていないか確認をしないでわたったり、横断歩道ではないところ
をわたったりすると車にひかれてしまうかもしれません。私は、道
路をわたるときには、必ず、車が来ていないか左右を確認してから
わたることや、横断歩道や歩道橋をわたることを常に頭に入れて生
活しています。他にも、道路を歩くとき、石けりをしたり友達とふ
ざけたりしながら歩く人もいます。石が何かにぶつかったり、急に
道路に飛び出してしまったりすると、交通事故につながるかもしれ
ません。道路を歩くときには、一列になって歩くことや、道路では友

達とふざけたり、石をけりながら歩いたりしないように、自分が気を付けるだけではなく、登下校の際には、下級生の様子も見守りながら生活していきたいと思います。

二つ目は、自転車に乗る人にとって危険なところです。内子町には、町並みや商店街など道はばのせまいところがいくつかあり、毎日多くの人や車が通行しています。そのため自転車で通るときにはとても危ない場所だと思いました。私は、ふだん自転車に乗りませんが、友達といっしょに出かけるときに友達がよく乗っています。また、兄も出かけるときなどに自転車を利用しているので、それらの様子を見ていると、危ないと感じることがあります。例えば、私の家の前にある道はばがせまい坂道です。その道の先には保育園があり、小さな子どももふくめて多くの人がよく通ります。以前、兄が、自転車のスピードを上げて、その坂道を下っているのを見たことがあり、とても危ないと思いました。スピードを出していると、人や車を通っているにも急に止まることができずにぶつかってしまい、交通事故につながることがあります。この前、愛媛県の自転車事故の件数が、去年よりも増えており、自転車事故によってけがをした人や亡くなった人も増えているという記事を新聞で読みました。私の身近なところにも自転車事故の危険性があるので、自転車事故は増えているのだなと思いました。私が自転車に乗るときに気をつけたいことは、必ずヘルメットをかぶってから乗ること、左側通行をすること、定期的にブレーキやライトなどの点検をすることです。今年の四月には、国から、自転車に乗る際のヘルメット着用而努力義務が課されました。当たり前のことですが、まだまだできていない人もいると思うので自分でも気を付けたいです。自転車はとても便利な乗り物ですが、

乗り方をまちがえると自分の命や人の命までうばうとても危ない乗り物でもあります。そのことを忘れないようにしたいと思います。

三つ目は、車の運転手にとって危険なところです。私たち子どもは車を運転することはできませんが、車の運転をしている人に危ないと感じることはあります。例えば、私がつまっている小学校は、児童げん関の前が道路になっており、時々車が通ります。児童げん関は、多くの子ども達が利用するところなので車で通るときにはとても危ないと感じました。私たち歩行者は、飛び出しをしないことや、左右をよく見てわたることなどに気を付けていますが、車の運転をする人も、子どもが飛び出してくるかもしれないという予測をして、スピードを出さないようにゆっくり通ることや、周りをよく見て運転することなどに気を付けてほしいと思います。

これからも危険なところを頭に入れて、交通安全に気を付けながら生活していきたいです。そして、事故のない安全な町になればいいなと思います。



「気を付けてね」が広まる世界へ

鬼北町立近永小学校

六年 大野 てな

「事故」と聞くと、私には忘れられない出来事があります。

あるイベントの発表会の日、来る予定だった父は見に来ませんでした。後から分かったことなのですが、出かけていた父が車で家に帰ると中、車のフロントガラスに大きな竹が落ちてきて、車が動かなくなっていたのです。父は、ガラスの破片を体に浴びて、うでが赤くなっていたそうです。その話を聞いた時、心臓がドキドキして、何だかとてもこわくなりました。もしかしたら、父が、その事故で大けがをしたり、死んだりしてしまったら、と考えたら、私は、頭が真っ白になりました。事故の原因は、充分に整備されていなかった竹林の竹が、ぐう然父の車の方に風で飛ばされて来て、ぶつかったことによるものでした。

事故は、いつどんな時に、どんな形で起こるかだれにも分かりません。父のように、いつも通り道を通っているだけでも予測できない事故に出くわしてしまうこともあります。急いでいるから、だれも見えていないから、そんなちよつとした心のすき間に、事故のこわさがひそんでいるのだと思います。車を運転する人、道を歩いている人、自転車に乗っている人、それぞれがしっかりとルールを守り、お互いを思いやる気持ちを持つことで事故を減らすことができるはずです。そのためには、もう一度しっかりとルールを学び、交通安全の正しい知識を周りに広めることが大切だと思います。

例えば、信号が黄色になったらわたらない、信号が青になっても、左右をしっかりと確認してから手をあげて歩き出す、自転車は横に並ばずたて一列になつて運転するなど、小学生の私でも出来ることはたくさんあります。毎日当たり前に過ごしていると、ついつい油断して、「ちよつとぐらい大丈夫かな」と思ってしまうこともあります。しかし、そんな時こそ気を引きしめ直して、事故にあわない事故を起こさない努力を続けていこうと思います。地球上から少しでも悲しい交通事故を減らすために、自分ができることから始めていきたいです。

私の父と母は、毎日車に乗って仕事に行きます。そんなときに、いつもおたがいに、「気を付けてね。」と言葉をかけ合っています。私も、学校へ登校する時には、父母から同じように、「気を付けていってらっしゃい。」と言われます。私は通学班の班長をしているので、一年生の妹たちが車に気を付けて歩けるよう、道路ではふざけないよう注意したり、信号はしっかりと見てわたれるよう声をかけ合ったりしています。どんなときも、私は「気を付けて」の言葉が、頭にうかんでいます。

毎日家族で伝え合っている「気を付けてね」のやさしい気持ちを、地域にも広めていきたいです。



一つしかない命を守るために

篠山小中学校組合立篠山小学校

六年 岡原 梓実

みなさんは、自転車に乗ってこわい思いをしたことはありますか。私は、こわい思いをしたことがあります。

五年前の夏休み、友達の家に行った帰りに雨が降ってきました。これからもっと降りそうだったので、急いで家に帰ることにしました。私より先に友達の家を出た姉に追いつこうと、必死に自転車をこぎました。その時、トラックが左から現れ、もう少しでぶつかりそうになりました。トラックの運転手さんは、クラクションを鳴らししました。あせった私は、そのままスピードをゆるめることなく、道路の反対側に向かって進んでしまいました。運転手さんが私に気が付いてブレーキをかけてくださったおかげで、事故にあうことも、けがをすることもなくすみました。しかし、今思い出すだけでもぞつとするようなこわい体験でした。

今年の夏休み、大学一年生の兄が車の運転めん許をとるために、自動車学校に通っています。だから、家に帰ると教習所での話をしてくれます。兄はよく

「車の運転をするのはこわい。」
と言っています。

「何で。」
と私が聞くと、

「もし事故を起こしてしまったら、乗っている自分たちだけでなく、

ぶつかってしまった相手の命をうばうかもしれないと思うとこわいんだよ。路上に出て運転していると、自転車に乗っている人が急に飛び出してきたり、道路の真ん中を走ったりするから、事故を起こしそうになつて、運転するのがいやになる。」

と話してくれました。兄の話を聞きながら、車を運転している人の思いを改めて知ることができました。そして、トラックとぶつかりそうになったあの日のことを思い出し、運転手さんに対して本当に申し訳ないことをしたと反省しました。雨で視界が悪い上に、あせって周りをよく見ずに、自分勝手な運転をしてしまいました。雨で視界が悪いのは、トラックの運転手さんも同じです。その上、兄が言っていたように、歩行者や自転車に乗っている人たちの命の責任を感じながら運転しているのだと思うと、私以上にこわい思いをしたにちがいありません。

前に、自転車の人がぶつかつて、相手の方がなくなるというニュースを見ました。車だけでなく、自転車に乗る私たちも、命の責任を負うということを改めて感じて、気を付けなくてはいいけないと思いました。

中学生になると、自転車で通学します。今まで以上に乗る機会が増えるので、事故にあわない、事故を起こさないようにするために、常に周りに気を付けて、自転車を運転するようにしたいと思います。一つしかない自分の命も相手の命も守りたいです。

【中学生の部】

常にみんなの安全を

四国中央市立三島南中学校

一年 曾我部 温花

私は、自分の不注意で、人にけがをさせてしまう一歩手前の危険な状態になったことがあります。今、思い出しても、あと一秒でもブレーキをかけるのが遅れていたら、きっとぶつかっていたらと思う、ぞつとします。

その出来事は中学生になるとワクワクしていた小学校卒業後の春休みに起こりました。私は、欲しいものがあつて、近くのコンビニまで自転車で行きました。いつもならお姉ちゃんに行くのですが、その日は部活動でいなかったため、一人で行きました。普段はあまり自転車に乗らないので、坂道で立ちこぎをしたとき、少しふらふらしていました。その時、前からはおばあさんが歩いてきていました。坂道を自転車から降りて歩くのがしんどくてそのまま立ちこぎをしていました。おばあさんと距離を取れば大丈夫だと思っていた瞬間、バランスが崩れ、自転車がグラッと曲がり、おばあさんの方に近付きました。焦ったせいで、どうしようもパニックになり、どんどんおばあさんの方に近付いていきましました。ぶつかる！と思った瞬間、なんとかブレーキをかけて、ギリギリ止まることができました。止まった直後から、ものすごい罪悪感に襲われ、何回も「ごめんなさい、ごめんなさい。」と謝りました。おばあさんは「私は大丈夫。心配せんでええよ。それよりあんたは大丈夫なん？」と

言ってくれました。自分を心配してくれてるのは分かりましたが、私の心は、何かずっしりと重たいものが乗ったような気分でした。なんで、そんな気持ちになったのだろうと考えてみると、私が危険な運転をしてしまつて、怒られても仕方なかったのに、逆に心配をかけさせてしまい、罪悪感を感じてしまったのだと思います。

私は、この経験から、いつも左右確認をしなさいとか、道の端を通りなさいなどと学校で繰り返し言われるのは、自分の命を守るためだけじゃないと気が付きました。自分の命だけでなく、周りの人の命も守らなくてはいけないと思います。カーブを勢いよく曲がったりして、その先に歩行者の方がいたら、ぶつかってしまいます。スピードが出ていたら、お互いが大けがしてしまうかもしれません。自分の運転のことだけを考えずに、「この先に歩行者がいるかもしれない。車がいるかもしれない。」とイメージしながら運転することが大切だと思いました。

私は毎日自転車通学しています。この生活が毎日続くと、慣れからくる「きっと大丈夫だろう」という気持ちが芽生えてきます。実際、「あつ！」と声が出そうになることもあります。一回の重大な事故が起きる前には二十九回の軽い事故があり、その前には三百回の「ヒヤリハット」があるとされています。この「ヒヤリハット」を増やしてしまわないように、常に安全に気を付けて自転車に乗りたいです。危なかった体験を忘れず、自転車に乗るときには気を引き締めて運転するようにしたいです。交通安全教室では自転車の乗り方について丁寧に教えてくださり、気を付けることの確認もしました。それでも、同じ学年の友達には自転車で転んでけがをしてしまった子もいます。自分も他人事ではないと思います。これからも、自分が注意するのはもちろん、友達とも声を掛け合い、みんなで安全運転を意識していきたいです。

父の思い

新居浜市立南中学校

一年 續木 祐志

ぼくの父は声が大きい。電話で話す声はもっと大きい。

「横断歩道を渡る時は青信号でも左右確認してよ」

父はいつもぼくにそう言う。父は二十年ほど前、青信号の横断歩道で車にはねられたのだ。その日、父は友人との待ち合わせにおくれそうで急いで自転車を走らせていた。急いでいたので、左右確認もしなかったのかもしれない。青信号で進みだし、横断歩道の真ん中にさしかかったとき「ドンッ」左から近づいてきた黒い影にはね飛ばされたのだ。父は、青信号で横断歩道を横断中に右折してきた車にはねられた。気づいた時には、父は横断歩道から離れた車道まで飛ばされており、自転車の前輪はつぶれていたそうだ。現場は片側四車線の大通りで父は必死で足を引きずって歩道まで歩いた。体中が痛くて仕方なかったと言っていた。その後、しばらくはムチウチのりハビリで通院していたが、痛みが治まったため、終了した。

その五年後、通勤と中の父は突然のめまいと耳鳴りにおそわれた。診察の結果、耳をぶつけたことによるしやうげきで耳の機能が失われたのではないのかということだった。長い年月をかけて父のちよう覚はむしばまれていったのだ。当時の父は、鳴り止まない耳鳴りに気がくるいそうになったそうだ。今はもう慣れたと笑っていたけれど、ぼくが左側から話しかけると聞こえづらそうだし、父がテレビを見ている時はいつも音量が大きいので母がしぶい顔をしている。い

つも何食わぬ顔で仕事をしている父だけれど、きつと人知れず苦勞しているんだろうなとぼくなりに心配している。

交通事故が人の人生に与える影響は大きい。一しゅんで命が奪われてしまうこともあれば、父のように何年も経った後にしよう状が出て、そしてその後何年もかけてその人の人生に影響をおよぼすことだってあるのだ。父の事故の相手は父がちよう力を失ったことなど知らない。知らずに今日もハンドルをにぎっているかもしれないのだ。

警察庁によると平成三十年から令和四年までの過去五年間で、自動車と歩行者がしう突した交通死亡事故は四千件以上も発生している。その事故の七割は歩行者が横断中の事故だ。また横断中の事故のうち七割は横断歩道以外の場所を横断している時に発生しているそうだ。つまり、残りの三割は横断歩道で発生した事故だ。横断歩道は歩行者の横断のためにつくられた場所だ。それにもかかわらず事故に巻き込まれるのだ。そう考えると三割という数は決して小さくはないと思う。父が言う通り、青信号の横断歩道でも車にひかれることがあるのだ。横断歩道上の事故ではやはり車の運転手が細心の注意をはらうべきところであるが、人間は完べきではないので歩行者を見落とすことがあるかもしれない。ニュースでも横断歩道で車が止まらず発生した事故を時々目にする。横断歩道上で事故に巻き込まれた場合、法律的には悪いのは運転手かもしれないけれど、どちらが良い悪いと言い争ったところで、事故が起きたあとでは失われた命がもどってこないし、失われた父のちよう力が回復することもない。事故に巻き込まれた被害者が身体的精神的な負担を強いられるのだ。そうになると、歩行者も青信号だからと言って何も気にせず横断してよいというわけではないだろう。父が言うように渡る前

にきちんと左右を確認して曲がってくる車がないか、またはその車が歩行者である自分に気がついているのかどうかを気にしながら横断しなければならぬと思う。

ぼくは中学に入学して新しい自転車を買ってもらった。母と入学前に自転車に乗り、何度も学校への道を行き来した。母は毎回のように

「こわい、危ない、溝に落ちる！」

と何度も言った。よつぽどぼくの運転技術が未熟だったのだろう。そんな風にして、ぼくと母は通学ルートを決めた。ぼくの通学路には大きな通りを渡る横断歩道もある。半年が経ちずいぶんぼくの運転技術は向上したはずだけど登校前父はいつも言う。

「横断歩道を渡るときは左右確認してよ」



祖父の免許返却を通して

愛媛大学教育学部附属中学校

一年 仙波 乃阿

私には、今では八十代の祖父がいる。祖父は、車やドライブが大好きで愛車の手入れをよくしていた。私も、お手伝いをするのが楽しかった。

時は六年前。私が小学生になったばかりの頃の事である。家族でニュース番組を見ていた。その内容は、「高れい者の危険運転」をテーマにし、交通安全を広く呼び掛けるものだった。その中でも、特に家族をハツとさせたのは、高れい者ドライバーが小さな子供を事故にあわせてしまっているという現実だ。ドライバーから見ても背の低い子供は見えにくかったり、子供がとる予期せぬ行動に対応できない事が主な原因だという。また、急な飛び出しがあった時、驚き、対応が遅れてしまう。とつさに、アクセルとブレーキをふみ間違え、結果、大惨事を引き起こしてしまうのだ。そこで、家族は、祖父の免許返納をうながす行動に出る事にした。母も、そろそろ運転をやめさせたいと考えていたようだ。あれほど車好きの祖父が素直に言う事を聞いてくれるのだろうかという思いもあったが、みんなで、車で出かけている祖父の帰宅を待った。これまでも、何度か返納の話を母がしていたが、祖父が「うん。」とは言わなかったのだ。当時小学一年生の私は、待っている間に、お絵描き帳と色鉛筆を使って書類を作成した。免許返納を祖父が承だくした事を記す、サイン書である。一生懸命書いて、自分のリュックサックに隠しておいた。そうして

ると、祖父が帰ってきた。みんないつも通り「おかえり。」と優しく出むかえた。その日は、遠くの友人の家に野菜を届けに行っていたらしい。一番に祖母が口を開く。「お父さん、話があるんやけどね。」祖父は口をぽかんと開け、驚いた様子で座った。そろそろ運転も危ないし、免許を返したらどうかと提案するが、一切応じず、「いや、まだ乗れる。大丈夫よ。」の一点張り。母も祖母もあきれた様子。押し問答が続いた。このままでは、祖父が免許返納できないと感じた私は、隠しておいたサイン書を取り出した。少しドキドキしたが、思いきつて祖父に渡してみた。すると、「これ、乃阿ちゃんが書いたの？」と笑顔で言ってくれた。その後に続いて母も、今の高れい者ドライバーの現実を語った。一つ目はやはり認知機能も低下し、判断能力もおとろえるため、運転はますます危険に、そして手の届きにくいものになるということ。二つ目は当時小学校一年生の私と、同年れいの子供達も高れい者ドライバーの運転で、命を落としてしまう悲惨な事故が多発している事であった。他にも、それぞれの思いを伝え、祖父の返答を待った。すると、しばらく考え込んだ後、パツと表情を変えて「そうやね。乃阿ちゃんみたいな小さい子供を、もしも事故にあわせてしまったら、取り返しがつかんけんね。」と納得してくれたのだ。私が作ったサイン書にも、サインをしてくれて本当に良かったと安心したのをよく覚えている。私は、その後少し大きくなつてから、なぜ高れい者は免許返納をかたく拒むのか、様々な記事やテレビ番組の情報を集め、考えてみた。元気で若々しい高れい者は、まだまだ運転には自信があると思っているのかもしれない。これは祖父にも当てはまるだろう。そして、車がないと生活が不便になる場合だ。まわりに家族も住んでおらず、長時間歩くのが困難であったり、

遠い場所にしか日用品や食材を売っているお店がないとなると当然、車なしの生活は、不便なうえ大変難しくなるだろう。次に、病院に通っている場合だ。一人暮らしだと、段々通院が難しくなる。送いでしてくれる人がまわりにいないという事は、自家用車で通院するという選択をする高れい者が増えているそう。やはり、若者とは違い、生活に支障をきたす事がせざるを得ない理由となっているようだ。運転する選択肢しか残らないままで本当に良いのだろうか。私は、高れい者ドライバーの現実を改めて知り、切実な思いを感じた。

私が、よく見ている愛媛の番組「ひめポン」で、地域の乗りあいタクシーやバスがある事を知った。通院や買い物など、外出の際の送迎を、利用しやすい価格で行ってくれる、何とも画期的な取り組みだ。車内は、毎日笑顔でおしゃべりを楽しむ、こ立しやすい高れい者のコミュニケーションの場となっている。この様に、免許返納しても、安心して生活できる仕組みこそが、とても大切なのだ。

私は、祖父の免許返納を通じ、食品の移動販売トラックや、車内診りよう等、返納後に便利な取り組みについて、よく知りよく調べたと感じている。特別な取り組みではなく、どの地域にもあるべきものとなつてほしい。そして、悲惨な事故が少しでもなくなる様、心から願っている。私が免許を取ったら、安全運転で、一番に祖父をドライブに連れて行ってあげよう。

みんなのための交通安全

松山市立内宮中学校

一年 高松 瑠花

「交通安全」とは、何を意味しているのだろうか。調べてみると、交通安全とは安全に交通をすること、または交通事故防止のためのみんなの心がけや取り組み、を意味しているそうだ。しかし、私は交通安全とは、こうした意味通りの交通事故防止の取り組みだけではなく、人と人が思いやりの心をもって通行することだと思う。思いやりの心を持つことで、交通安全が守られた世の中になると思う。

私は今までに直接事故にあったことはない。しかし、私が小学生のとき危うくもう少しで事故にあいそうになったことがある。私はいつも学校に行くときにある交差点を通る。その交差点で信号が青になって横断歩道を渡ろうとすると、目の前を車が通り過ぎて行った。私はとても驚いたし、もし、もう少し早く歩いていたら事故にあったのではないかと思い、怖くなった。そして、そのときは、その車に乗っていた人だけが悪いと思った。その車に乗っていた人は、赤信号にかわる直前だったのか、黄色信号のため急いで交差点に入ったのか、信号のタイミングギリギリで横断歩道を通過したのだろうか。しかし黄色信号は、道路交通法によると、安全に停止できない場合を除いて、必ず止まらなければならないとのことだ。なので、この場合安全に止まる余裕がなかったのかかもしれないが、車が止まらなければいけなかったのかもしれない。

しかし改めて考えると、悪いのはその車に乗っていた人だけでは

なく、自分もだと思った。私も、信号が青になったからといって、左右の確認をせずにただ信号の青色を信じてすぐに渡ろうとした。左右の確認不足がいけなかったと思った。そして、毎日のように通っている道だからと少し油断していたのかもしれない。青信号は進行できるといっただけであって、安全に進行できるかはわからないのである。だからこそ、青になっても左右の確認を自分の目でしっかり行わなければいけないということがわかった。道路交通法の決まりをしっかりと学んで、その決まりを守ることが大切だと思った。

道路を通行するときには、このように自分ももちろん気を付けることが大事だし、まわりの人も気を付けることが大事なのは当たり前だ。それに加えて、あの人は横断歩道を渡るのかな、徐行や停止したほうがいいのかな、あの車は左折してくるかもしれないから停止して様子をみようかな、とお互いが自分以外の人のことを考えた運転や歩行することが大切だと思った。私はこれから、思いやりの心をもって道路を通行しようと思うし、一人でもそんな人が増えたら、交通安全の守られた世の中になるだろうと思う。



これまでの経験を生かす

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 宮川 祢音

私は五歳の頃、そろばんに行くために、向かい側の駐車場に車を

停めてもらい友達と三人で歩いて道を渡ろうとした。その時大雨なのに傘を持っていなかったため、左右を確認せずに一人で飛び出してしまった。クラクションの大きな音がして横を見ると、車がすぐそばにあった。気が付いた時にはもう遅い。何も考える暇はなく、そのまま車と衝突し、交通事故に遭ってしまった。私はその時、初めて車とぶつかることはどれだけ危険か知った。これまで感じてきたものと比にならないくらい痛かった。それから痛みが引くまでの数時間は泣くことしかできなかった。何年も前のことではつきりとは覚えてなかったけれど、混乱もしていたんだと思う。周りにはたくさん車が停まっていて、その中には救急車もあった。その後はすぐ病院に運ばれて検査をした。幸い、左足のかかとを骨折しただけですんだ。車で私達を連れて行ってくれた友達のお母さんは心配して泣いていた。連絡を受けた私の母は弟を祖母に預け、病院に駆けつけた。友達のお母さんは、何度も私や母に涙声で謝っていた。道路や横断歩道を渡る時は左右を確認してから渡る。母や幼稚園の先生から散々言われてきた言葉だった。だけど心の隅では、「自分が事故に遭うわけがない」「そんな当たり前なことをできないわけがない」と思っていたのだらう。やはり人間は油断なんてするものじゃない。その勝手な思い込みと勝手な行動のせいで事故を起こし、たくさんの人に心

配と迷惑をかけたのだから。でも一番大きかったのは運転手さんへの罪悪感だった。今回の事故は私に原因があるのに運転手さんは事故のショックでかなり憔悴していた。自分が運転する車に小さな女の子がぶつかったのだから、かなりトラウマになったと思う。それだけのことを起こした自分が情けなく感じた。この事故から道路を渡る時は左右確認をしつかりするようにしていた。

それから八年後、小学校を卒業し、中学二年生になった。いつも通りの帰り、疲れてボーっとしていたのか、自転車に乗った私は車と接触してしまった。私が直進している時、右折の車に巻き込まれてしまった。運転手さんは焦ったような悲しいような表情で車から降り、「大丈夫？大丈夫？」と聞いてくれ道の端の方まで肩を貸してくれた。その場にいた人や近所の人たちも駆け寄ってきてくれ、学校や救急車・母に連絡してくれた。その後すぐに救急車が来て病院まで運ばれた。心配そうな母はもう病院に着いていた。検査結果は打撲で、「たいしたことなくてよかった！」と思った。それから数分後、校長先生、副校長先生、学年主任と担任の先生が病院まで来てくれていた。先生方の「あなたが無事なら大丈夫」の言葉に申し訳なさとしらさうと嬉しさがあつた。きつとここに来る途中も心配してくれていたんだろうなと思うと罪悪感でいっぱいになった。その時ふと八年前のあの事故を思い出した。あの時もたくさんの人に迷惑と心配をかけてしまった。注意したつもりでも長い時間がたてば慣れがでてなあんなになつていたのかもしれない。しかし、車と接触することは最悪死ともつながってしまうのでそんな気持ちではいけなかったのだ。今回は自分が直進だったので、左右の確認がきちんとできていなかったのが原因だ。直進だといって安心せず、一時停止して左右確認していれば、

事故はおこらなかった。事故で怪我をした私は部活の記録会にも出場できなくなった。運転手さんはもちろん家族にもかなり心配させてしまった。事故はだれも幸せにならない。周りの人をこれ以上心配させないためにも、これからはもっと気を引き締めていきたい。自分で事故に遭った経験を学校でも友達に話し、交通事故について考えるきっかけになればいいと思った。調べてみると、中学生の自転車事故の原因の五割以上は、「一時停止不足」「安全不確認」だった。全国でも私のような経験をしている中学生が多いということだろう。自転車だって「車両」だという気持ちを持ち乗ることが必要なのだ。



自分の命は自分で守ろう

松山市立鴨川中学校

二年 大橋 蓮

「ドン」「ガシャーン」「キーンツツ」僕の家近くの交差点では年に数回交通事故が起きます。車同士の場合もあれば、車と自転車、自転車同士、車と歩行者の場合もあります。中でも一番多いのが車と自転車の接触事故です。

最近では今年の三月にこの交差点で車と自転車の接触事故がありました。丁度、母と姉が買い物に行く途中で目の前で事故を目撃したそうです。事故の原因は自転車の飛び出しと車が一時停止を怠ったからだそうです。その日の晩御飯の時に母と姉から交差点で事故があった事。目の前で目撃して怖かった事。自転車には大学生が乗っていて大学に登校するのにかなり急いでいた事。車には高齢の女性が乗っていて仕事に行くのに急いでいた事。車の運転手が動揺していた為、事故を目撃した人が協力して警察や救急車に連絡した事。大学生が頭を打って怪我をしていた事。様々な話を聞きました。僕の家ではこの交差点を「魔の交差点」と呼んでいます。魔の交差点で事故が起けると必ず家族会議をします。この日も家族会議をしました。「急いでもいい飛び出しは絶対にしない事」「ヘルメットは必ず被る事」「時間に余裕を持って出掛ける事」「横断歩道がある場所では必ず横断歩道を渡る事」「右、左、右を見て車が来ているか確認する事」など、様々な確認を改めてしました。中でも父が、

「横断歩道では車が止まってくれて当たり前とは思わず自分の目でき

ちゃんと確認して自分の命は自分で守らないといけない」と言ったのが印象的でした。

僕は毎日「魔の交差点」を通って登下校しています。特に朝は「魔の交差点」は沢山の人が利用しています。横断歩道に歩行者がいても猛スピードを出して通り過ぎる車、飛び出しをする自転車、並走している自転車、横に広がって歩いている歩行者、音楽を聴きながら自転車で乗っている人、スマホ片手に運転している人など色々な人がいます。魔の交差点を渡るのに時間がかかる日もあるけれど僕は時間に余裕を持って家を出発しているので平気です。落ちついて右、左、右を見て安全を確認して渡れています。自分が気をつけていてもいつ事故に巻き込まれるかわかりません。いつ加害者になるかわかりません。いつ被害者になるかわかりません。一人一人が自分の事ばかりで無く周りの人の事も考えルールを守り落ち着いて思いやりのある行動をして自分の命も他人の命も守れる安心で安全で優しい社会になって欲しいです。これからも僕は家族会議で話し合った事を忘れず自分の命は自分で守れる行動をしていきたいと思っています。そして、周りの友達が交通ルールを守れていなかったら注意したいと思っています。



命を守る

松山市立久米中学校

二年 荒井 将吾

交通安全は、ぼくたちの日常においてかかせない重要なテーマだと思っています。交通事故はぼくが住んでいる愛媛県でも毎日のように起きています。自動車同士の事故や自動車単体、自動車と人の接触事故などさまざまです。時には死亡事故もありニュースで知る度にとっても悲しい気持ちになります。どうして事故は無くならないのだろうか。事故を減らすにはどうしたらいいのだろうか。

交通事故は事故を起こした人だけでなく、関係のない人まで巻き込んでしまうことがあります。そしてその事故にあった人のその後の人生を大きく変えてしまうのです。後遺症が残る場合もあれば、事故のトラウマに苦しめられる場合もあります。だから事故にあわないためにぼくたちは交通安全への意識を高めていかなければなりません。

ぼくはこの夏休みに交通事故を経験しました。朝早く、バスに乗って兵庫県に行く途中で、乗っていたバスが高速道路の中央分離帯にぶつかってしまいました。その後ふらふら運転になり左右の壁に数回ぶつかりようやく止まりました。そのときぼくは早朝だったこともあって寝ていましたがそのぶつかった衝撃で目が覚めました。音がすごく火花も散っていました。後で車体を確認すると運転席側の側面がへこんでいました。幸い運転手も乗客も怪我はありませんでしたが、とても恐怖を感じました。原因は運転手の居眠り運転でし

た。ぼくがこの事故で思ったことは、この事故は僕自身では防ぐことができず、普段どおりに生活していてもいつ事故に巻き込まれるかわからないということです。だから、自分が交通安全を守ることが当然だけど、交通安全の重要性を社会全体に広めることが大切だと思います。

歩行者として気をつけることは、道路を歩くときは白線の内側や歩道を歩くこと、横断歩道や歩道橋を渡ること、信号を守り信号機がない場所では、よく周りをみて車が来るかどうかを確認しながら渡ることが大切です。また、自転車に乗るときは、交通ルールを守り、ヘルメットを着用し、夜間はライトを点灯させることが大切です。ぼくは自転車通学生ということもあり自転車に乗ることが多いです。だから自転車に乗る際は、先ほど述べたことに気をつけて乗るようにしています。

車の運転手も交通安全を守る義務があります。スピード違反や飲酒運転、スマートフォンの使用などの危険なことは避け、安全運転を心がけることが大切です。歩行者や自転車に対しても十分な注意を払うことで事故を未然に防ぐことができます。

また幼稚園や保育園、学校などで交通ルールや安全な行動の仕方などを教えることも重要だと思います。小さな子どもは、突然道路に飛び出すこともあるし、予測ができない行動をします。また将来の運転者としての意識を育てることも大切です。登下校時には、大人が見守ることも効果的だと思います。ぼくの地域も毎日、旗当番の人が立ってくれています。

ぼくは小さいころにバイクとぶつかったことがあります。歩いていて飛び出してしまいました。ぼくの不注意でした。今思うと、ぼ

くのせいでバイクに乗っていた人にはとても迷惑をかけたと思います。子どもの急な飛び出しでも車やバイクに乗っている人が悪くなります。子どもを守るためにも、車やバイクに乗っている人を悪くしないためにも周りの大人は注意を払う必要があります。

交通安全は社会全体の責任です。一人一人が交通ルールを守り、意識を高める努力が必要です。ぼくたちの一つ一つの行動が、より安全な社会を作り上げることができると思います。ぼくも、より一層気を引き締めて交通ルールを見直し、交通事故を起こさないように気をつけていきたいです。身近な人たちにもしっかり交通ルールの重要性を伝えていきたいです。大きなことはできなくても小さな一歩からできることをしていきたいと思っています。



自分の命を守るために

八幡浜市立松栢中学校

二年 新瀬 美優

皆さんは、二〇一三年四月から自転車乗車時のヘルメット着用が「努力義務」になったことを知っていますか。テレビのニュースや新聞などでもよく取り上げられていたので、知っている人も多いかもしれません。私は、初めてそのニュースを聞いたとき、少し「嫌だなあ。」と思ってしまいました。それは、ヘルメットは見た目が不格好な上に、せっかくセットした髪型も乱れてしまうからです。それに、自転車に乗り降りするたびに、ヘルメットを付けたり外したりするのも面倒だなと感じていました。そこで、ヘルメットの必要性や努力義務化に疑問を持った私は、そのことについて調べてみることにしました。

すると、驚くことが分かりました。自転車乗車中に事故にあった場合、ヘルメットを着用していない場合は、着用している場合に比べて、死亡率が二、二倍にも跳ね上がるのです。また、死亡者に限定して見てみると、損傷部位として最も多いのは頭部であるというデータも見付けました。その頭部を守るものが、ヘルメットなのです。さらに、自転車事故の死傷者数は、高齢者と私たち二十歳未満の若者が半数を占めています。私は、これらのデータを見て、ヘルメットの着用がどれだけ重要であるかが分かりました。

では、実際に交通事故に遭ってしまおうとどうなるのでしょうか。運が良ければ、擦り傷や打撲などの軽傷で大事には至らないかもし

れません。しかし、頭を強く打った場合には、記憶障害が残ったり、意識が戻らなかつたりする可能性もあります。そして、死亡に至る危険性もあるのです。自転車の事故では、私たち中学生が被害者になるだけではなく、加害者になる場合もあります。そのようなケースでは賠償金も発生します。相手の方が亡くなったり、重い後遺症が残ったりした場合には、何千万円もの賠償金が発生したという事例がいくつもあります。自転車という乗り物は、誰でも気軽に運転できますが、その分、誰にでも交通事故の加害者になる可能性があるのです。もちろん、自分が被害者になる可能性もあります。私は、これらのことを知って、「交通事故は決して他人事ではない。」と感じました。

実は、私も最近、自転車で走行中にヒヤリとした経験があります。それは、友人と遊んだ帰りのことでした。その日は、家の門限にぎりぎりの時刻になってしまい、少しスピードを出しすぎていました。勢いよく交差点を曲がろうとしたとき、タイヤが滑って転倒してしまいました。幸い、周りには誰もおらず、軽い擦り傷だけですが、そのまま家まで帰ることができました。しかし、「もしそこが車通りの多い交差点だったら……」「近くに歩行者がいたら……。」と思うと、今考えてもぞつとします。

交通事故は、ほんの一瞬の油断で命を落としてしまうこともあります。死んでしまうと家族や友達と遊んだり、けんかをしたりすることもできなくなります。そしてそれは自分の大切な人たちを深く悲しませることもあります。また、加害者側も「人の命を奪ってしまった。」という深い後悔や罪悪感、厳しい周りの目に耐えながら生きていかなければなりません。

このように、交通事故というものは、誰も幸せにはできません。そんな事故から命を守るためには、交通ルールを守ること、そして、ヘルメットを着用することがとても大切です。髪型の崩れが気になる人には、髪型が崩れにくいヘルメットや、おしゃれなデザインのものもあると聞きました。このようなものを活用することで、より快適に安全に自転車に乗ることができると思います。私はこれからの毎日を楽しみ過ごすために、正しくヘルメットを着用し、安全運転を行っていきたいです。自分の命を守るために。



交通事故で失わない命

鬼北町立広見中学校

二年 中川 いろは

私は最近、子供が交通事故に遭ったというニュースを見ました。母と一緒にそのニュースを見ており、私に、

「自分は気を付けとつても、車はいつ突っ込んでくるか分かんねえね。」

と言いました。その言葉を聞いた私は、過去に交通事故に遭いそうになったことを思い出しました。

私は、ある日の学校の帰り道に、一人で歩いて帰っていました。一人だったので、つい下を見ながら歩いていました。そのとき、前をよく見ていなかったせいで、前から来た車に気付かず、もう少しでぶつかりそうになりました。そのときの車の「ギューッ」という急ブレーキの音と、運転をしていた人の焦りや驚きが混ざったような表情は、今でもはつきりと覚えています。そのときは、あと少しで自分は死んでいたかもしれないと思い、とても怖くて泣きながら帰りました。私はそれまで、交通事故のニュースを見て、毎回「自分には起きないことだろう。」と思って、どこか他人事として考えていました。けれど、実際に交通事故に遭いそうになってから、誰か一人だけでなく、みんなが交通安全について意識しないといけないのだなと思うようになりました。

私の父は、交通事故に遭ったことがあります。その事故は、相手の車が車線を越えてぶつかってきた、車同士の事故でした。そのときの実際の様子は分からなかったけれど、グチャグチャになった父の車

を見て、父が生きていたことは奇跡だったのだなと感じました。私は、父が事故に遭ったと聞いたとき、頭が真っ白になるほどのショックを受けました。そして、そのあとはすぐ心配になり、ずっとそわそわしていました。この体験から私は、運転をする全ての人にお願ひしたいことができました。それは、普段運転をするときに周りにいる人を、全員自分の大切な家族や友達だと思つて運転をしてほしいということです。自分の大事な家族や友達が、交通事故に遭つてけがをしたり、命を失ったりしたら、悲しくて辛い気持ちになると思います。その気持ちを、普段は関わりのない歩行者や車の運転手にも向けることができれば、交通事故を減らしていくことができると思います。

私は、このような経験があるからこそ、交通事故の怖さも、不安も知っています。自分の大切な人を交通事故で突然失ったとしたら、言葉にできないくらい辛く悲しいと思うし、絶対に後悔すると思います。交通事故は、一瞬にして相手を傷付けたり、命を奪ったりしてしまう、とても罪の重いものです。交通事故に遭った人やその家族たちは、一生、その傷を負い続けます。その一方、交通事故を起こした人も、一生、罪の意識や責任を負い続けます。交通事故は、誰にとつてもマイナスイメージな出来事で、とても恐ろしいものです。だから私は、登下校をするときも、出歩くときも、必ず交通ルールをしっかりと守るように心掛けています。周りの状況をきちんと目で見て、耳で聞いて感じることを意識し、安全に生きていきたいです。そして、毎日、

「気をつけてね。」

と、手を振つて見送りをしてくれる大切な家族のためにも、元気な姿で必ず家に帰りたいです。

だから私はヘルメットをかぶる

新居浜市立中萩中学校

三年 曾根 美優

あの時ああしていれば。そんな後悔はもういやだ。

ある春、父に兄から一通の電話があつた。兄が父に電話をかけるのはめつたになつたので少し疑問をいだいた。そして兄が第一声発した言葉は、

「事故つた」

だつた。ぞつとした。過去にも同じようなことがあつた。

当時兄が中学一年生、私が小学四年生の春だつた。近所で兄が軽トラックとぶつかつた。五年も前のことなので私はそのようなことがあつたというぐらいにしか曖昧にしか覚えていない。が、当の本人は鮮明に記憶に刻まれているという。買ったばかりのきれいな自転車は三分の一のサイズになつた。部活に急いでいく途中の事故だつた。辛い怪我人はいなかつた。だが、自転車の壊れようからただ事ではないことを当時九歳ながら私は感じた。

そんな過去がありながらこの第一声。

慌てずにはいられなかつた。その不安な気持ちとは裏腹に兄の声は冷静だつた。命に別状はないからとにかく来てくれと。私は行つても何もできないと思い、父と母だけがその場へ行つた。これは後に母から聞いた話だ。自転車でトラックと衝突したと。私の住んでいるこの地域はさか道やわき道が非常に多い。家の場所が坂道の上にあるので、どこに行くにも行きがくんだり、帰りが坂になる。必然的

に行きはスピードが出やすい。何もがなくとも自転車はスピードを早め進んでゆく。私自身も学校に行く途中で何度も車にぶつかりそうになったことがある。兄の二度目の事故もやはり行きの途中だった。トラックとぶつかり、トラックの助手席の窓ガラスが割れていた。そして、自転車はぐしゃぐしゃになり兄のカバンの中の電子機器が原形とは程遠い形になっていた。トラックの運転手と兄の双方に大きな怪我はなく、兄はすり傷程度ですんだ。この話を母から聞き、ほっとしたと同時に窓ガラスの衝撃に意識をすべてもっていかれた。窓ガラスはそう簡単に割れるものではない。割ろうとしても苦戦するぐらいだ。そんなものが事故となるといとも簡単に割れてしまう。そしてぐしゃぐしゃになった自転車は事故を起こして買い換えた二台目だった。五年前と同じような形で自転車をまた買い換えることになることを五年前の兄は想像できたであろうか。

この兄の二度の事故は私に交通事故に対する脅威を与えた。そしてこの二件目の事故は自転車を使用する兄と私にとって大きな課題を残していた。それはヘルメットの着用だ。兄はヘルメットをかぶっていなかった。目立った外傷は無かったが軽く頭をぶつけていたので、念の為事故後病院で検査をすることになった。検査は異常なしのことだった。家族共々ほっとした。だがヘルメットを着用していれば、このような検査は行わなくてすんだ。今回は検査の結果が異常なしのことだったがもし脳などに何か後遺症が残っていれば、ヘルメットをかぶらなかつたことに強く後悔することになるだろう。私はこの一件でヘルメット着用への意識が変わった。それまでは、暑い、めんどくさいなどの悪いイメージばかりだった。実際に学校の帰り道、ヘルメットをかぶっておらず反省文を書いたことがあった。友

達との帰宅中にヘルメットをかぶらずに自転車に乗っており、その姿で車に乗っていた先生と出くわした。その次の日、反省文を書き各担当の先生からハンコを貰い提出した。正直めんどくさいとは思っていないかった。かぶってもかぶらなくてもいいしよ。私の心の中にはそんな言葉があった。だが兄の事故は私にとつてとても衝撃的だった。ヘルメットに対しあんな考え方の私がヘルメットをかぶろうと思うぐらいには。

事故というものはおそろしい。そんなことは誰でも分かっているはずだ。ただ、私は事故を自分とは程遠いものとして考えていた。ニュースなどで見る悲しい出来事は画面の向こうの話。自分には関係ないと。だが事故は身近で起こった。これが現状だった。事故は一番身近な家族という存在から命を奪おうとした。本来、常にヘルメットをかぶるべきだが、私は身近の事故でヘルメットの大事さに気がついた。私は兄の二度の事故と自分の誤ちを教訓にしなければならぬ。兄は今でもあの時ヘルメットをかぶらなかつたことを後悔している。どんなに後悔しても過去にはもどれない。そんな私達はこの出来事を未来の行動の変化に繋げることでしかない。二度と同じ後悔をしないために。大事な人を悲しめないために。だから、私はヘルメットをかぶる。

安全な社会の実現のために

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 高橋 美夏

あなたは今までに身近な人が交通事故に遭い、辛い経験をしたことはあるか。きつと多くの人が「ない。」と答えるだろう。しかしその一方で「ある。」と答える人も少なくはないと思う。テレビのニュースで毎日、当たり前のように交通事故について取りあげられる。そして「軽傷」や「重傷」、最悪の場合「死亡」という単語がアナウンサーの口から発せられる。私はこれまで、このような交通事故のニュースはそこまで注目していなかった。日常の習慣として、ただ朝テレビをつけ、悲しいニュースを右から左へ受け流すだけだった。

しかし中学生になってその考え方は変わった。

中学一年。私はいつものようにスマホをいじり友達と連絡をとっていた。すると、小学生の頃のライングループに一件の通知が届いた。私はその通知を開くと、震撼した。それは、小学生のころの友達が通学途中に車に轢かれ、亡くなったという文章だった。

「意味が分からない。」

私は声に出してそう言った。去年まで一緒のクラスで、毎日のように会っていたその子が突然この世からいなくなることが本当に理解できなかったからだ。しかし、文章を見る限りその出来事は嘘ではないことが分かり、現実を受け入れるしかなかった。

通知が届いてからの一週間はすごく長く感じた。まさか大切な友達が交通事故で亡くなるとは思っていなかった。友達がいるのが当

たり前だと思っていた。一週間後のお葬式では、「亡くなった」という事実だけが伝わった。友達と、家族とただ泣いた。交通事故で一人の命が奪われたことが悔しくてたまらなかった。家に帰ってから気持ちちは変わらず、泣いて泣いて泣き続けた。

それから約二年。私はテレビで見る交通事故のニュースを他人事として一切見られなかった。もしかしたら次は自分が事故に遭うかもしれない。大切な家族や親友が事故に遭うかもしれない。その不安が常に私に押し寄せてくるのだ。

私はこの経験を通して皆に伝えたいことがある。それは、どんな交通事故でも事故に遭った本人は一生のトラウマになること。そして、被害者の家族、私のような友達も大きな悲しみと恐怖が心に残り続けること。よくテレビで事故を起こした加害者の人が、

「次から気をつけます。」

と言っているのを見る。しかしいつも思うが、今回事故に遭ってしまった被害者の人は一生の心の傷を負っている。事故は二度と起こしてほしくないのだ。だから特に車を運転している人、またバイクの人は本当に初心を忘れないでほしい。また私のように未成年者でこれから運転をする人は責任を持つようにしてほしい。これは当然私にも当てはまるため、私も安易な判断を絶対にすることがないように気をつけたい。

そしてもう一つ伝えたいことがある。それは身近な人との生活、そして「当たり前」を大切にしたいことだ。具体的に言うと、家族に日頃から感謝をすること、友達とコミュニケーションを沢山とること。それだけかと思う人もいるかもしれない。しかし大切な人を亡くして以降、その人が自分にとってどれだけ大きな存在だったか

を知った。いなくなってから感じたのだ。だから今からでも自分のできることをよく考えてほしい。自分や周りの人が交通事故に遭い悲しい思いをしてから気づくのでは遅いのだ。少なくともこの作文を読んでいる人は私が伝えたいことを受けとめ、実際に行動してほしい。一人でも多くの人が交通事故に遭ったり、身近な人が被害に遭ったりすることがないように願う。

小学生の頃は時間が経つのを待っていただけだった交通安全教室も今では真剣に取り組んでいる。ぜひ今の小学生たちにも遊び半分ではなく、自分が実際に事故に遭わないように取り組んでもらいたい。何度も言うが事故に遭ってからでは遅いのだ。一人でも被害者が出てはいけなくと強く思う。

約二年前、あの交通事故が起きてからは私の祖母は車の免許を返納し、自転車に乗ることをやめた。自主的にやめたのだ。皆のご家族も車の運転免許についてよく話し合ってほしい。被害者の責任を取らなければいけないのは加害者だが、全ての責任を負うことは絶対にできない。また、どれだけ心の傷をいやそうとしても、事故に遭う前よりも良くなることも絶対はない。一人一人が細心の注意を払って安全、そして快適にすごせる社会が築けるようにしたい。いや、必ずする。私もこの作文を書いて、改めて交通事故の恐ろしさを感じた。基本的な交通ルールをしっかり守り、加害者、被害者にならないようにしたい。

事故を防ぐために自分にできること

松山市立三津浜中学校

三年 篠原 ひより

「お母さん、また交通事故だつて。」

「最近多いね。気を付けないと。」

朝のニュースでたびたび目にする交通事故のニュース。私と同年くらいの人や、お年寄りの人、今までにもたくさんの方が交通事故に遭っているのだろう。

そのニュースを見て何日かたったある日、私は、友達と部活に行く途中だった。

「危ないっ」

急な出来事で最初は何が起ったのか分からなかった。私達が横断歩道を渡っている時、大きなトラックが私達に気づかずそのまま走っていったのだ。トラックが私達に突っ込んできた時、私はトラックに気づいた友達の声で「ハッ」とし急いで走って横断歩道を渡った。

「怖かったね、死ぬかと思った。」

みんなが口を揃えて言う。

その後も、トラックの運転手は私達にしばらく気づかなかった。その時思った。

「運転手の人私達のことまったく見えていなかったんだ。」

こういう人達のちよつとした不注意で事故は起きる。と実感させられた。でもそれは、歩行者側の不注意でも同じことだ。あの瞬間、友達が、私が、運転手が誰も事故が起きてしまうと気づいていなか

れば、本当にどうなっていたのか、考えれば考えるほど心臓がキュッと縮んでしまいそうだ。

あの時以来、私は交通事故に対して敏感になった。横断歩道を渡る時、異常なほど左右を見てしまう。信号が赤に変わっても運転手の人は気づかずそのまま走って横断歩道を横切るんじゃないか。そんなことまで考えてしまう。でもそのぐらい私にとってのあの出来事は大きかったんだと感ずる。そして私は、交通事故について少し調べてみた。すると事故による年間の死者数は二千六百三十六人、発生件数は約三十万件ということを知った。私は、こんなに一年間の間に事故が起こり、亡くなっていることを初めて知りものすごく驚いた。そこで事故を防ぐために自分になにかできることはないか考えてみた。一つ目は、周りをよく見て動くことだ。信号が青になったからといってそのまますぐに横断歩道を渡ったり、道に落ちてしまった物を無意識に走って取りに行ったり、すべて交通事故になりかねない。これらの原因は、しっかり周りを見ていなかったことだ。どんな場面でも、周りをしっかり見てから動くことを忘れないようにしなければならない。二つ目は、このくらい大丈夫を減らすことだ。歩いている時、信号が青色のチカチカになって赤になった。赤になり急いで渡る。これは歩行者だけでなく車でもよく見る光景だ。でも、この「このくらいなら」はとても危険だ。小さな油断は大きな事故に繋がるからだ。その時の、一瞬の判断を間違えないことが大切だと思う。三つ目は、自分で事故への対策をすることだ。例えば自転車を乗る時、もしものためにヘルメットをかぶり、頭を守る。このもしものための対策が、命に繋がっていくと思う。そして私がこの事故への対策がとても大切だと感じるのは夜だ。夜はとにかく暗く、運転手が歩行者を

見つけるのには少し時間がかかる。その時に大事なものは、自分が今ここにいるということを運転手に早く知ってもらうことだ。夜、歩く時には、ライトなどを持ち運転手に合図することで事故を減らせると思う。今、私が紹介した行動はすべて「命」という言葉に結びついていく。自分の命は自分で守ることを忘れず行動していきたい。私は、このような体験がきっかけで交通事故に対し真剣に考えるようになった。事故は本当にいつ起こるのか分からない。その時のために対策をすることはとても大切だ。これから、交通事故を防ぐためにできる事を積極的に行動に移し、自分や他の人の命を守りたいと思う。



ヘルメットの必要性和重要性

松山市立三津浜中学校

三年 渡部 蒼央

「ヘルメット、必ず被りなさいよ。」

僕が幼い頃から口ぐせのように母から言われている言葉だ。そのおかげもあり、中学生となった今ではヘルメットは少しの距離でも欠かさず着用している。今年の四月より、自転車利用時のヘルメット着用「努力義務化」がスタートした。それまでは、遊びに行く時周りの友達にヘルメットを被っておらず、自分だけが被っていて気恥ずかしさを感じていた。それでも着用し続けたのには訳がある。

小学生の頃、習い事のサッカーで自転車を利用することが多かった。初めは素直に言いつけを守り、ヘルメットを被っていたものの学年が上がっていくにつれて面倒になっていき、着けない日が続いていた。ある日のこと、サッカーに行く途中、いつも通りの道で公園前の交差点を信号待ちしていた。信号が青になり、同じく信号待ちをしていたバイクが走り出し、同時に僕も自転車を漕ぎ始めた。その瞬間、車が赤信号なのにも関わらず、そのまま猛スピードで交差点に進出し、バイクと衝突した。バイクの人は頭を強く打ったが、両者ともに命に別状はなかったものの、小学生だった僕にとって初めて目の前で事故を目撃し、とても印象に残っている。一歩間違えば事故に巻き込まれていたかと思うと、今でもぞつとする。バイク運転時のヘルメット着用は法律で義務化されているが、この事故でバイクだけに限らず、自転車に乗る際にもヘルメットがいかに重要なのかを

身にしみて感じた。また、青信号でも油断せず、左右をよく確認し、身の安全を確保してから渡ることを心がけようと改めて思った。

愛媛県では、自転車利用時のヘルメット着用について早く取り組み、平成二十五年に「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」を施行。全年齢を対象に自転車利用者の責務としてヘルメット着用を規定している。また、令和二年に実施された自転車ヘルメット委員会によるインターネット調査で愛媛県が着用率全国一位とヘルメット着用にとっても力を入れている。しかし、高齢者、成人の着用率は依然として低く、また通勤・通学時は被っていても、遊びに行く時などのプライベートタイムではヘルメットを被っていない人が多いのが現状だ。「手軽な乗り物」という油断を生みがちな自転車だが、万が一の事故で頭部に損傷を受けると死亡に至る事故に繋がってしまう。

この体験を踏まえて、「ヘルメット」というものの必要性や重要性をもっと多くの人に知ってもらいたい。そのために、自分が正しく欠かさず着用するのはもちろん、身近な友達などに着用の心がけを持ってもらいたいと思う。面倒だからとか、少しの距離だからとか、着用しない意見は多々あるだろう。しかし、ヘルメットを被る。ただそれだけで自らの命を守る大切な役割となることを改めて認識してほしい。これから、「努力義務」でヘルメット着用が浸透するの不安や心配もある。けれども、「周りには着けてないから別にいいだろう」とそういった風潮がなくなっていく、一人一人の意識が高まっていけば、ヘルメット着用が当たり前になっていくと思う。

交通事故^{ゼロ}を目指して

松山市立三津浜中学校

三年 高橋 春瑠香

「ドーン」

前の車にぶつかり、車が宙に浮いた。一回転した。そして、道路へ転んだ。

私はその日、家族で外食をしていた。注文が終わり、ボーッと窓の外を見ていると、店の内にまで聞こえる音が聞こえてきたのだ。ドーン。その音と同時に私の目には宙に浮く車の姿が映った。初めての光景だった。

一時間前、私たちも通ったあの道。一分前も平然としていたあの道。誰もが事故が起こるなんて想像もしていなかっただろう。事故はいつ、どこで起こるか分からない。誰かの一つの気の緩みが誰かの命を巻き込む大きな事故につながる。私は実際に交通事故を見て、事故の怖さ、恐ろしさを知った。

日本では、二〇二二年に三十万八百三十九件の事故が…

しかも、二千五百人もを超える死者が出ている。日本では、バリアフリー対応型の信号機や道路標識、道路交通環境などの整備。警察による交通違反の取り締まりや交通安全教育・活動が行われ、少しずつ交通事故は減少傾向であるが、まだまだ事故が多いのが現状である。私は、このようなたくさんの方が起こっている現実と五年前、事故を目の当たりにしたことから、「交通事故^{ゼロ}」の国にするために私たちにできること二つ考えてみた。

一つ目は、飛び出しによる事故を減らすこと。このような事故は、ドライバー側が悪いように思われているが、歩行者側にも責任がある。私も友達と話すことに夢中になっていて、左右を確認せず道を渡ってしまったことがあった。その時は、「この道、車は通らないから大丈夫」と思っていたが実際そうとは限らない。運よく車とはぶつからなかったが最悪の場合、私は車にひかれて事故になっていただろう。もし、ドライバーさんも「この道は人や車が多く通らないから大丈夫」と思って、スピードを出していたのならもっと大きな事故になっていたかもしれない。このように、一人の気の緩みが二つ重なると大きな事故につながる。そのためにも、いつ、どんな時でも、どんな事情があつたとしても、周りを確認することが大切である。周りをよく観察することで自分の安全を守れるとともに、目や耳が不自由な障害者の方やお年寄りの方、元氣いっぱいな子供を守ることも、つながると思う。

二つ目は、高齢者の事故を減らすこと。交通事故で亡くなった高齢者は五十%を超えていることが分かった。そこで、高齢者の事故を減らすための取り組みが必要だと思った。高齢者の事故の原因として上げられるのは、安全不確認、脇見運転、運転操作不適などの身体機能や判断力、注意力の低下によるもの。また、認知機能の低下や認知症のおそれがある人、認知症になっている人も高齢者の事故の内、四十四%もいることが分かった。認知症は、認知機能の記憶力や判断力などが低下し、治療を行っても完治することが難しい病気。また、年を重ねるごとに発症する確率が急峻に高まり、誰でも発症する可能性がある病でもある。なので、地域で行われている行事や会に参加し、いろいろな人と会話や運動を通して触れ合うこ

とが大切だと思う。その際に、認知機能や運動機能テスト。身体能力判断力、注意力、記憶力をアップするためのクイズ、運動、計算などをを行うと良いと思う。そのためには、地域での交流を深めておくことが大事だ。このことによつて、もし自分が認知症になった時に気づいてもらうことができたり、相手が認知症になった時に自分が気づいてあげることができる。交通事故が起きる前に、運転をやめることができ、日本が目指す「交通事故0」^{ゼロ}につながると思つた。

私は交通事故を目の当たりにして、今まで知らなかった本当の現実というものを肌で感じた。日本では、このような事故が何百件、何千件、何万件と起きていることに、悲しみを覚えた。

現在の日本では、一人一人が責任を持つて、歩行、運転することが大切だ。「ここは車が少ないから大丈夫」と自分で勝手に思い込むのではなく、「ここはいつも車が少ないけど、もしかしたら、今日は車がいるかもしれない」と過去の事実に捉われず、未来のことを考えて歩行することも大切なのではないか。私はこれから先、一つ一つの未来を考えて行動したいと思う。

「目指せ、交通事故0！」^{ゼロ}



誰かの命を守る行動

松山市立南第二中学校

三年 曾我 瞳

「ドンツツッ！」

右から車が来ているのが見えた次の瞬間、衝撃音と共に私は地面に叩きつけられた。家を出て数百メートル進んだ交差点。いつもなら左右を確認して通っていた道をその日は部活に遅れそうで左右の確認を忘れていた。案の定、右側から来ていた車と衝突した。車のフロントバンパーに自転車のペダルが食い込むほどの衝撃を受けていた。それなのに私は左膝、左肘を擦りむいたのと、軽く腰を打っただけだった。そのときは自分は受身が上手だったのかと呑気に思っていたけど、よくよくヘルメットを確認してみると少しへこみやコンクリートとの擦りでできたであろう傷があった。あるときヘルメットを被っていなければ頭を打っていたと思うと怖くなった。このときヘルメットの重要性を再認識した。調べてみるとヘルメットの有無による事故ではヘルメット未着用者の死亡率がヘルメット着用者の約二倍も増加するそうだ。なのでヘルメットを被るのはとても大切である。しかし、ヘルメットというのは方が一の危機を守る道具のひとつに過ぎない。ヘルメットを被っているからと言って確実に命が救われるという保証はないのだ。だからこそまずは、事故を起こさない心掛けをするのが大切だと思う。

免許や燃料が必要なく幅広い世代で使われている自転車。歩行者との事故により相手を傷つける加害者となったり、車との事故によ

り、大怪我や命に関わる事故を起こし被害者となったりする。そんな危険な乗り物。しかし、危険な乗り物でもきちんと対策を立てることで事故を起こさないことはできると思う。そこで私が交通事故で学んだことを紹介する。

私が交通事故で学んだことは三つある。

一つ目は自分の目で左右を確認することだ。最近ではカーブミラーが道路に設置されている。しかしそれだけでは完全に安全とは言えない。鏡が曇っていたり、急な対応は難しい。また、カーブミラーに映し出す範囲には限界がある。近年ではカーブミラーの機能を過信して一旦停止することなく交差点等に進入したり、左右確認を怠ることによる事故も増加している。そのためカーブミラーを利用しつつ、自分の目でも確認するのが一番だ。見通しの悪い交差点や一時停止の標識がある交差点では交通事故率は高い。車、バイクは通っているのか、スピードはどのくらいなのか、歩行者はいないか、自分の目だからわかることもある。だからこそ自分の目で確認する必要があると思う。

二つ目は時間に余裕をもって行動をすることだ。あのときは部活に遅刻しそうで目の前しか見ておらず、自転車を漕ぐスピードもいつもより速かった。「急がないと、急いだら間に合うかな」という心の焦りがどんどん大きくなっていった。心の焦りというのは自分の周りに目を向けることを疎かにしてしまう。だからこそ余裕をもって行動することで自然と焦りもなくなり、周りに気を配って行動することができると思う。交差点で車や歩行者と譲り合いができ、交通ルールを守ってより安全に走行ができる。それにさっきの自分の目で左右を確認するのも心に余裕をもっていないと出来ないことだと思う。

三つ目は交通事故を起こしたとき周りに心配と迷惑をかけてしまうことだ。私が交通事故を起こしたと言ったとき、多くの人が心配してくれた。家族、友達、先生方、相手の方。「軽い事故だよ。体も全然元気だよ。」

そう言っても気にかけてくれる人もいた。なんだかむず痒い気持ちになった。ほんとに心配してくれているのもわかったが、心配してくれる分少し罪悪感があった。自転車と自動車の事故での過失割合はだいたい自動車の方が割合が高くなる。あのとき、私もスピードを出してぶつかっていたのに事故の過失割合が自転車が高いことに心苦しくなった。相手の方も車で人とぶつかったので心苦しかったと思う。交通事故というのは、自分も相手も悲しく後悔が残ることだ。なので私は、身をもって交通事故を起こさないことの大切さを知った。もう絶対に不注意による交通事故をなくそうと思った。

私は今まで交通事故なんてそうそう起こらないと思っていた。しかし今まで交通事故を起こさずにいられたのは相手の人が配慮してくれていたからだ。自分が幸運の持ち主だったのではなく、相手の誰かの命を守ろうとする行動により助かっていただけなのだ。だから私も、誰かの命を守る行動をとっていききたいと思う。予測、配慮、速度の管理、自己点検、日頃から注意をしていれば交通事故は起こらないだろう。だから私は多くの人に誰かの命を守る行動をとって欲しい。交通事故による不幸が起こらないために。

「気を付けて」の大切さ

八幡浜市立松柏中学校

三年 鳥生 咲彩

「気を付けて。」これは、私が学校に行くときに、母から毎朝言われる言葉である。

ある朝の出来事だ。その日急いでいた私は、「気を付けて。」という母の言葉を「はい。行つてきます。」と軽く聞き流すようにして自転車で家を出た。いつもは、車の通行が多い道路は注意して渡っていたが、その日は「いつも車は来ないから。」と、軽く考えて道路を渡った。渡り終えると、すぐ後ろを車がスピードを落とさずに通っていた。一瞬の出来事だったが、「私が道路を渡りきるのがあと少し遅かったら。」と考えると、恐ろしくてたまらなかった。

この出来事をきっかけに、私は母に毎朝言われている「気を付けて。」という言葉の重み、そこに込められた母の気持ちを考えた。そして、どれだけ大切な言葉だったのかを改めて実感することができた。

私は「自転車事故の割合が高いのは、『シニア』ではなく『中高生』である。」という記事を読んだ。子供からお年寄りまで気軽に利用できる乗り物である自転車は、通勤や通学、買い物といった普段の生活で移動手段に使われている。このように、生活に欠かせない自転車であるが、年齢層別利用率を見ると、十代に比べ、五十代以上の中高年の利用率の方が高かった。にもかかわらず、年代別の人口十万人当たりの自転車事故の割合を見ると、中学生及び高校生（十五

〜十九歳）の事故率が、他の全ての年齢層よりも高かった。この記事では、中高生の自転車事故が多い要因として、次の二点が挙げられていた。一つ目は「自転車利用や交通に関する経験が浅く、事故の危険性に対する認識が低いこと」である。二つ目は、「ルール、マナーに関する教育を受けているものの、自転車という車両を運転している」という意識や責任感が低く、実際の現場での行動に結び付きにくいこと」だそうだった。

私は、この記事を読み、普段の自分の自転車の乗り方や、町で見かける自転車の運転について考えてみた。そして、中高生の高い自転車事故率の原因が、「自転車という車両を運転している」という意識や責任感が低いことにある」という内容に納得した。私も、町で見かける中高生の自転車のスピードが速すぎると感じたり、停止線で止まっていない自転車を見たりしたことがあるからだ。

自動車と自転車は違うように見えても、同じ車両である。少しの気の緩みで重大な事故につながる恐れがある。自転車事故を起こさないためには、自転車という車両を運転しているという意識をきちんと持つことが必要だ。自転車に乗る全ての人は、運転者としての責任があり、自分が加害者になる可能性があることを理解しなければならぬ。私はこれからも交通ルールやマナーをしっかりと守り、安全に自転車を運転したい。そして何より、「気を付けて。」という言葉に込められた思いをしっかりと頭に入れて行動したい。自転車を運転する人たちはもちろん、自動車の運転手さんも、安全に「気を付けて」運転してほしい。全ての運転者や歩行者がそのことを心掛けることで、不幸な交通事故は減らせると思う。

一人一人の命を守るために

愛南町立御荘中学校

三年 桑原 愛結

世の中には生活を豊かにする便利な交通手段がたくさんあります。その中でも私は自転車をよく使用します。友達と遊びに行くときやサイクリング、登下校のときなどさまざまです。そのため、私は休日にブレーキがきくのか、タイヤに空気が入っているのかを確認することを習慣にしています。自分の命や他人の命を守るため、私の大切に行っていることです。私は今までに恐ろしい体験をしたことがあります。

一つ目は、私が小学三年生の頃、自転車に乗っていたときに怪我をしたことです。急な坂を調子に乗ってブレーキをかけずに下っていました。「危ない」と思ったときには遅く、すでにスピードが出過ぎていてバランスを崩してしまいました。私がそのときに履いてた、お気に入りのズボンは血だらけになり捨てて羽目になりました。今回は軽い怪我で済みましたが危うく、大怪我をしていたり命に関わっていたかもしれません。しかし、膝にできた傷は六年経った今でも残っています。今では当時の自分を悔やむばかりです。幸い、私だけが怪我をしたので良かったものの他の人を巻き込んでしまっていた可能性があります。それを考えると、少しの油断で大きな事故につながってしまうのだと思いました。取り返しをつかいないことになる前に自分でやっていいことと悪いことの区別をしつかりしたいです。

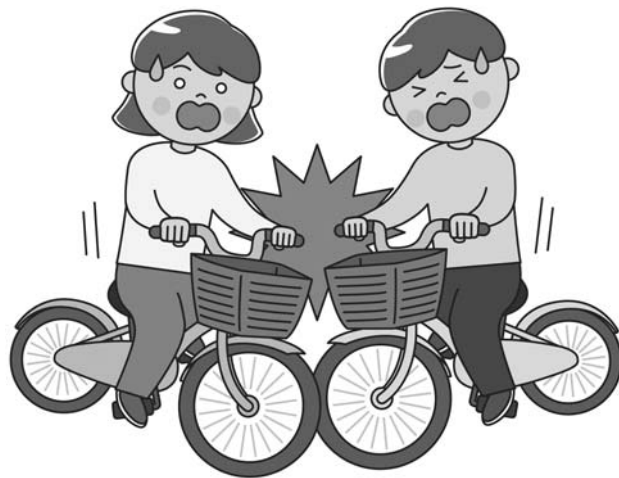
二つ目は、二年前の夏のことです。家族四人で仲良くサイクリン

グに出かけました。そこで、母と姉は二列走行で話をしながら自転車を漕いでいました。「危ないな」と思いながら見ていたそのとき、「あっ！」という声が聞こえ、母は土手に落ちていき姉は道に倒れました。私は、急な出来事で止まることができず、姉を自転車で轢いてしまいました。私は無傷でしたが、母は鎖骨を骨折し、姉は肋骨を骨折するという大怪我でした。原因はやはり、二列走行です。急なことで止まらなかったというものの今回私は加害者の立場になります。状況を理解したときには遅く、そう簡単には止まることができないということを実感する経験でした。楽しいはずのサイクリングが、体にも心にも傷が残ってしまったのです。

私たちの身の回りには危険がたくさん潜んでいます。私は自転車での事故を起こしたことがあります。油断をしていると「人」や「車」との事故も起こる可能性が高いです。信号のない交差点では、小さいときから教わってきた左右を見ることなどの細かいことも大切にしたいと改めて思いました。また、歩道だからといって安全とは限りません。いつ車や自転車と衝突してしまうかわからないので、目を配って安全を確保しておきたいです。最近、テレビを見ると交通事故のニュースが多いと感じます。その中には、事故に巻き込まれて亡くなっている方もおられました。飲酒運転や居眠り運転、ながら運転、スピードの出し過ぎが原因となり、大きな事故を引き起こすのです。たった一度の事故で人生が大きく一転する。毎日の平穏な生活を送れなくなる。「百害あつて一利なし」事故ではまさにこの言葉がぴったり当てはまります。「少しぐらい」といった軽い気持ちでどれだけ多くの人を傷つけてしまうのか、もう一度考えるべきだと思います。また、車に乗るときはシートベルトを着用する、自転

車に乗るときは必ずヘルメットをかぶるなどしておけば、助かる命も増えると思います。自分のためにも周りのためにもしなければいけないことをしっかりしていきます。私は将来、自動車運転免許を取りたいと思っています。その際は、ルールを守り自覚と責任を持つて運転するようにしたいです。

これまでの経験を通して、小学校から行われている交通安全教室のありがたさを感じています。交通安全教室は、交通ルールを守る意義を学ぶことができる機会となりました。まず、自転車に乗るときには「ヘルメットをかぶる」ことや「二列走行をしない」などの私たちができることを行うことで少しでも事故は減っていくと思います。何のためにルールがあるのかをもう一度考え直すことができたので良い機会となりました。被害者にも加害者にもなることなく楽しく自転車に乗りたいです。私の祖父は七十六歳です。そろそろ免許を返納しなければいけないのかと悩んでいるようですが、生活をするにあたりとても便利な車を使えなくなると非常に困ります。しかし、人の命には代えられません。歳をとるにつれて事故を起こしてしまう確率が高くなるのは事実だと思っています。命を落とさないようにするためにも返納する時期をよく考え、決断する必要があると思います。安心・安全で一人一人が笑って生活し、交通事故のない町、明るい未来を築いていきます。



自転車にTSマークを貼いましょう！！

◇ TSマークには、保険が付いているので安心



**プロの手による
自転車の点検・整備が
受けられて安全！**

**TSマーク
付帯保険は所有者以外の
方も対象になります！
(家族・友人・従業員等)**

TSマーク付帯保険金の請求の流れ



事故が発生した場合、速やかに最寄りの警察署へ届けるとともに、必ず三井住友海上火災保険(株)事故受付センターへ連絡をして下さい。

0120-258-189

TSマーク付帯保険の補償内容	赤色 TS マーク	緑色 TS マーク
賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に、法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○死亡・重度後遺障害 (1～7級) 限度額 1億円	○死亡・障害 (すべての人身事故) 限度額 1億円 示談交渉サービス付き
傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○入院 15 日以上 10 万円 ○死亡・重度後遺障害 (1～4 級) 100 万円	○入院 15 日以上 5 万円 ○死亡・重度後遺障害 (1～4 級) 50 万円
被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○入院 15 日以上 10 万円	○入院 15 日以上 賠償責任補償により対応

思いやり1.5m運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは1.5m以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いいたします。

交通安全協会のご紹介

① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<https://www.ehime-ankyou.or.jp/>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇 摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新 居 浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西 条	西条市新田133-1	0897-55-9911
西 条 西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今 治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松 山 東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松 山 西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松 山 南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊 予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大 洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内 子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八 幡 浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西 予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇 和 島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼 北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南 宇 和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	二十二年	さあかくにん	ライト	ブレーキ	ヘルメット
同	二十三年	星キラリ	自転車ピカリ	帰り道	
同	二十四年	いそいでも	かならずかくにん	みぎひだり	
同	二十五年	ヘルメット	ぼくのだいじな	おともだち	
同	二十六年	につぽんを	じまんしようよ	事故ゼロで	
同	二十七年	ルールむし	しん号むしは	わるいむし	
同	二十八年	しんごうが	あおでもよくみる	みぎひだり	
同	二十九年	ペダルこぐ	免許はないけど	ドライバー	
同	三十年	自転車は	車といっしょ	左側	
同	三十一年	とび出さない	いったんとまって	みぎひだり	
令和	二年	しつかりと	止まってかくにん	横だん歩道	
同	三年	自転車に	乗るならきみも	運転手	
同	四年	とうげこう	よそみ	おしゃべり	きけんがいつぱい
同	五年	ぺだるこぐ	ぼくのあいぼう	へるめつと	
同	六年	わたるまえ	わすれずかくにん	みぎひだり	

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株) 愛媛製造所
新居浜工場
宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJ C
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
太陽石油(株)
波止浜興産(株)
BEMAC(株)
真鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
愛媛支店
アカマツ(株)
アサヒビール(株) 松山支社
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業(株)四国支店
(株)井関 松山製造所
(株)伊予銀行
NTT西日本四国支店
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県指定自動車教習所協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県遊技業協同組合
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
(株)門屋組
(株)ガリレオコーポレーション
こくみん共済 coop 愛媛推進本部
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株) 愛媛支店
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)スズキ自販松山
(株)セキュリティエヒメ
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部
(有)大豊陸送
(株)たいよう共済 愛媛支店
(株)タカラレーベン
帝人(株) 松山事業所

(株)テレビ愛媛

トヨタ L&F 西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
日本郵便(株) 四国支社
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)
(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ
三浦工業(株)
(株)村上モータース
(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【伊予郡砥部町】

(医) 誠志会 砥部病院

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード
八水蒲鉾(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫

令和5年12月1日現在 88事業所



交通安全活動を支援しています。

一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101